



社会医療法人 愛仁会  
高槻病院 腎臓内科 医長  
高橋 利和先生

## 一貫した「全腎医療」で 患者さんの人生を診る

1994年神戸大学医学部卒業、同年神戸大学医学部第3内科入局。  
1995年愛仁会高槻病院内科医員、1999年京都大学大学院医学研究科入学。  
2003年徳島大学医学部附属病院腎臓内科医員、2006年徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部特任講師、  
2007年徳島大学医学部腎臓内科副科長、2009年徳島大学医学部附属病院人工透析部副部長を経て、同年社会医療法人  
愛仁会高槻病院腎臓内科医長に就任、現在に至る。  
日本内科学会認定内科医・総合内科専門医・内科指導医、日本腎臓学会腎臓専門医・指導医、日本透析医学会透析専門医  
・指導医。

### 腎臓内科医はドクターズ・ドクター

学生時代は地学に興味をもっていたのですが、研究と実践を両立できる理想的な仕事は何かと考え、医師の道を選びました。

専門は腎臓内科と透析です。若年時の健康診断における尿検査から透析治療、終末期まで、数十年にわたり患者さんと一緒に人生を歩んでいける点に惹かれました。

また、透析は臨床工学技師、看護師、医師の距離が近く、三位一体のチーム治療が欠かせません。研修医時代、透析に長年携わり定年を迎えた看護師さんがいましたが、過酷な仕事でありながら勤め続けられる、そういうやりがいのある仕事だと思います。

これまで、神戸、京都、徳島の各地域で、腎臓内科や透析治療に携わってきました。関西は腎臓専門医が少ないこともあり、どの現場でも自分がパイオニアでありたいと心がけてきました。特に、徳島大学では腎臓内科の立ち上げにかかわり、透析室を一から作り上げるというめったにない機会に恵まれました。CKDの啓発活動などに無我夢中で取り組んだ日々は、忘れられない思い出です。今も「立ち上げ」と聞くとうずうずしますね(笑)

私がめざす医療は、腎臓内科と透析を分けて考えるものではなく、総合内科医として最初から最後まで一貫して責任をもち、患者さんを診ていく「全腎医療」です。

また、腎臓内科医にはドクターズ・ドクターとしての役割もあり、薬剤性腎障害の抑止など、院内の他の科の先生や地域の開業医の先生が安心して腎臓の悪い患者さんの治療ができるバックアップも求められています。



### 教え子たちが私の活力源です

降圧治療において、腎保護期におけるARBの選択に大きな差は感じていませんが、透析患者さんは、その状態によって薬剤の選択が大きく異なります。例えばディオバンは降圧効果がスッと抜ける特徴があるため、他のARBよりも透析後期で血圧が下がる傾向のある患者さんに向いていると思います。

また、降圧治療で気を付けているのは、就寝時の血圧管理の必要性です。朝一種類、ター種類というような使い分けにより、内服のタイミングを分散させ、日内変動を抑えることが大切です。特に糖尿病性腎性では、胃腸障害が出て薬剤が溶けにくくなるため、一気に降圧しすぎないように、慎重な投与を心がけています。ARBは開業医でも普通に用いられていますが、高カリウム血症や腎機能低下などのマイナス面もありますので、製薬会社にはきちんと注意喚起をお願いしたいですね。また、MRさんには、医療現場と製薬会社、それぞれの立場から学術的な意見交換ができることを期待します。

いま、私の一番の喜びは後進を育てることです。教え子たち、教え子の教え子たちに志が受け継がれ、患者さんに「この先生でよかった」と思ってもらえる医師が一人でも多く活躍してくればこんなにうれしいことはありません。教え子は、私のエネルギーそのもの。これからも、彼ら、彼女らが働きやすい環境づくり、組織づくりに取り組んでいきたいですね。

### 社会医療法人 愛仁会 高槻病院

1977年、大阪・高槻市に開院。「患者様の満足する医療」を理念に掲げ、地域の人々への貢献を使命として医療に取り組んでいる。  
2016年の竣工をめざし、現在、全面建替え工事中。質の高い地域医療の提供、周産期医療・小児医療・救急医療の充実、患者にやさしい急性期病院、職員にやさしい急性期病院、人材育成をコンセプトに、患者さんがつるげる療養環境を整備し、高度な急性期医療、小児・周産期医療を提供できる病院づくりを進めています。

血液浄化  
センター